

ACT! SPECIAL



はしかと風疹の予防接種を受けるために集まった、タンザニアの難民キャンプで暮らす人びと(2021年)

特別対談
小児科医
ロジスティシャン

人生初、難民キャンプで生きる人びとに医療を届け、胸を熱くしたこと

日頃より、国境なき医師団(MSF)の活動をご支援くださいまして、誠にありがとうございます。今回は特別企画として、初回派遣から帰国したMSFの小児科医とロジスティシャンの対談をお届けします。ともに活動地はタンザニア。難民キャンプで生きる人びとと触れ合って心に響いたことや、初めての活動の手応えは？ぜひ最後まで、お読みください。



Profile

かねこみつのぶ
写真右 金子光延 (小児科医)

派遣期間 2023年4月～10月
赴任前まで、神奈川県内で小児科内科クリニックを経営。
「日本とは異なり、厳しい環境にある世界の子どもたちを助けたい」と
還暦前に一念発起。英語論文を書く、人道援助についても学び直すなどの
準備を数年重ねつつ、クリニックを後任に譲り、MSFに参加。

あいかわたくや
写真左 愛川琢也 (ロジスティシャン)

派遣期間 2023年8月～2024年2月
大学時代にカナダに留学。寮でブルンジ人と同室になり、人道援助に
関心を持つ。民間企業のエンジニアとして国内外で長く働く中で、
「人生の後半戦は、海外経験や管理能力を国際人道援助に生かしたい」と
考え、早期退職。MSFのロジスティシャンになる。

金子 タクさん、お帰り！ こっちで会えるのを楽しみにしていたよ。ンドウタの病院もあるの後、どうなったのか気になっていたし。

愛川 今回、同じ病院に赴任したけれど、時期はすれ違いましたからね。ノブさんが別の赴任地に移った後、病院も少し変わりましたよ。トリアージルーム^{※1}の改修を始めて……。

金子 トリアージルームで治療の順番を待つ時間が結構長いのに、僕の時には、座るところも天井もなくて、患者さんもつらそうだった。

愛川 そうなんです。それで、コンクリート打ちはなしの床にタイルを張ったり、天井を作ったり、壁もきれいにして(写真を見せながら)。

金子 これは見違えたね、すごい！

愛川 衛生上の観点はもちろん、患者さんが最初に入る部屋だから、「来て良かった」と安心してもらいたくて……。図面もない中、スタッフらが大工や左官の腕を振るってくれました。

※1：治療に入る前に緊急度や重症度を判定するための部屋。待合室の代わりとして使われることもある。



修復する前のトリアージルーム。床はコンクリート打ちはなし、壁も汚れていて、天井すらなかった。



愛川の着任後から修復工事がスタート。6週間かけて、この通り見違える仕上がりに。

—二人の派遣先はタンザニア北西部のンドウタ。難民キャンプでMSFが運営する病院では、情勢不安で隣国ブルンジから逃れてきた7.5万人の人びとに加え、現地の住民など、合計で約10万人規模の医療を一手に担っています。

金子 地域に外来機能のある診療所はいくつもあるものの、入院できる病院はMSFが運営するここだけ。赤ちゃんは1日10人超え、年間で4000～5000人生まれますが、そのうち5%ぐらいが重症で、その子たちを全て診る。病床数が限られているので、日本では退院させられないような状態でも帰さざるを得ません。子どもの栄養状態も悪いし、重症の肺炎やマラリアが多く、薬も足りない。人工呼吸器もレントゲンもない中での診療でしたね。

愛川 そんな制約の多い、厳しい環境で働く医療チームが仕事に集中できる環境をつくるのが、私たちロジスティシャンの仕事。物品の手配や水と衛生の管理、それに電気はジェネレーターで作っていて、停電しても20分以内に復旧できるように常時管理していました。

金子 病院内に加え、安全管理や患者移送まで、ロジの業務は幅広いよね。ンドウタの次に行つた、リワレの病院^{※2}では、ジェネレーターがショッちゅうダウンして酸素供給が止まり、赤ちゃんの体に負担をかけた。この時、MSFの病院のロジの質の高さを実感しましたね。

—患者さんでもあり、同僚として共に働くスタッフでもある、ブルンジ難民の人びと。二人は彼らにどんな印象を抱いたのでしょうか。

愛川 現場ではブルンジの方と一緒に働きましたが、最初は目も合わせてくれず、心を閉ざしていた人が多かったです。笑顔もなくて。

金子 確かに患者さんのお母さんたちは笑わないし、境遇のせいか、暗い顔をした方が多かった。

目をそらし、笑顔のない難民の人びとが心を開いた瞬間に立ち会えた

愛川 私は意思疎通のために、まずブルンジ人が使っているルンディ語を覚えてあいさつから始めて……。話すようになって、少しずつ信頼関係ができていったと思います。

金子 医療チームにも、優秀なブルンジ人の看護師がいてね。入院が長引くと、お母さんたちが「ほかの子どもの面倒も見なきやいけないからもう帰りたい」と怒り出す。そんな時も、「治してくれるから、もう少し待って」となだめてくれて、助けられましたね。ある重症の肺炎の子どものお母さんも最初は攻撃的だったけど、僕も「治すから信じて」と伝えて。首都の病院に移送する手配をした時は、大変なプロセスだったことを理解してくれて、「本当にありがとうございます！」と言ってくれた。あれは忘れられません。

—二人とも、今回が活動地への初赴任。苦労したことや工夫したことありましたか？

金子 現地の皆さん、頭が下がるぐらいよく働くのですが、日本と違って主治医制ではなく当番制。担当の時間が終わったら次の人の番になるため、何かが抜けちゃうこともあるんです。



ブルンジ難民で、キャンプで暮らしながら、看護師として働く仲間らと。

そのため、一つ判断が間違うと二手も三手も遅れてしまう。そこを自分が先手を打って細かい“抜け”を埋めて、集中治療室を回したところ、1カ月誰も亡くなりませんでした。現地のスタッフは、私の判断を信頼してくれるようになって。業務の流れを掴みたかったからというのもあります。本来やるべきスタッフの指導や教育というより、自分でやり過ぎてしまったかなと。そこは、少し反省点かもしれません。

厳しい境遇の中、MSFの仕事が難民スタッフの誇りと尊厳に

愛川 トリアージルームの改修もそうですが、優れた職人技術をもつスタッフに誇りを持って働いてもらいたくて、私は「君たちの仕事が役立ってるんだよ」と伝え続けました。それで、いつの間にかワンチームになれたような……。ある日、普段はTシャツを着て働いているブルンジ人スタッフがスーツ姿で來たので「今日はどうしたの?」と聞くと、「タンザニアに逃れてきて今日で8年なんだ」と。私は思わず言葉を失ったのですが、彼は清々しく笑っていて。厳しい境遇が続いても、仕事への誇りと尊厳をもって前向きに生きようとする姿を見て、彼らと一緒に働けて本当に良かったと思いました。

金子 そういう経験、僕もあった。リワレの時のことなんだけど、1300gで生まれて心臓に雑音があって、別の病院に送らなければ助からない子どもがいて。「保育器もないから、炎天下の中、申し訳ないけど、エアコンを使わずに運ばないと赤ちゃんの体温が下がって死んじゃ

うから」と説明し、看護師とドライバーに頼んで、早朝に出発してもらつたんです。昼には到着するはずが、病院に電話してもまだ着いていない。じりじり待つ中で、夕方の6時によくドライバーから「Baby is alive!」という連絡があつた。道中で酸素が切れたけど、彼らの判断で途中の病院で酸素を調達して、無事運ぶことができたんです。赤ちゃんの命を救つた彼らを、僕はすごく誇りに思いましたし、「すごいよ、よくやつたよ」とみんなで拍手して喜び合いました。

愛川 今回、厳しい体験も色々ありましたが、最後にスタッフと一緒に撮つた写真を見ると自分の顔が本当に笑つてゐるんです。それを見て、ああ、現場は楽しかつたんだなと。おまけに、帰国の時はサプライズで、アフリカの布キテンゲで仕立てた民族衣装までいただきて……。私に内緒で、仕立ててくれていたんです。

金子 それはうれしい! 信頼だね。目をそらすところから始まって、変わつたんだね。

活動は支援者の皆さまの思いと共にSNSへのコメントも大きな力に

愛川 つくづく思うのは、子どもたちの命を救えるのも、難民のスタッフがMSFで誇りをもつて仕事ができるのも、皆さまからのご支援があるからだということ。私自身も派遣中にMSF日本のSNSで活動内容が発信された時、「いいね!」やコメントがとても励みになりました。

金子 僕も苦しいこともあつたけど、現地で最後まで踏ん張れたのは、“MSFを支えている支援者の皆さまの思いを託されて來た”という気持ちが、心の芯にあつたからだと思います。

愛川 確かに。“この場にいるのは私だけ、私だけがいるのではない”というのは、現地でも感じていました。

金子 あと、同じ日に着いた同僚のカルロスにも助けられてね。食事に誘つてくれて、「今度は、南スーダンで働きたいんだ」という夢を話してくれたり、僕も日本の状況を語つたり……。彼らと撮つた写真を娘に送つたら、「青春してるね」と言われちゃつて。60歳を過ぎて、若い仲間と支え合う経験はいい刺激になった。その一方で、世界の活動地はまだまだ足りないものだけ。皆さまの思いと一緒に、未来を変える活動をこれからも続けていきたいですね。



各地から届く医療物資の荷下ろしや配置もロジスティシャンの仕事だ。

みなさまのご支援ご活動ごきよこがい
誇りです

—— 金子光延



© MSF

遠く離れた現場にも皆様のお声は届いています。

—— 愛川琢也



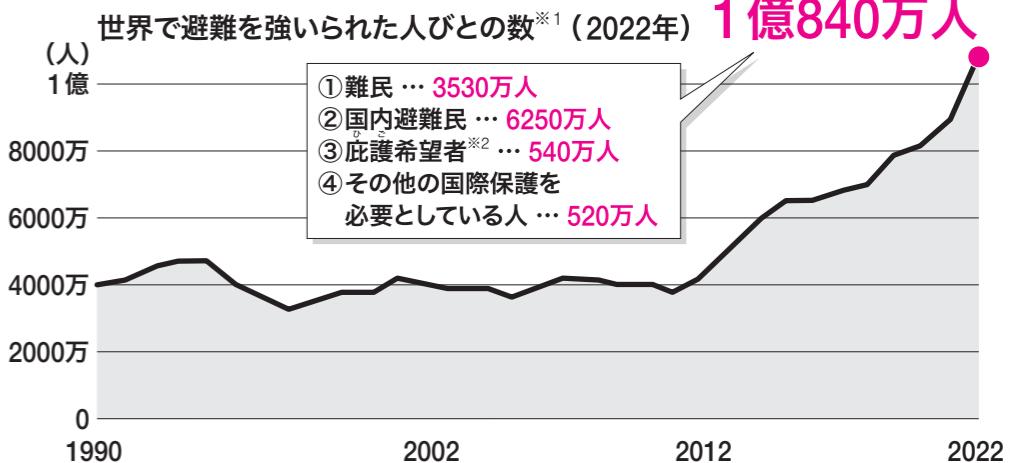
© MSF

深刻化する世界の難民・避難民危機

住み慣れた土地を離れ、国内外への避難を余儀なくされる人びとの数は年々増加中です。
スーダンやガザ地区の人道危機により、事態は悪化の一途をたどっています。



ガザ地区南部、ラファの避難民キャンプで給水車に並ぶ人びと。人口30万人の街に避難民150万人が押し寄せた。



難民や国内避難民の多くは、紛争や迫害、暴力から逃れ、避難を余儀なくされた人びとです。また、近年は気候変動や自然災害の影響で住み慣れた土地を離れざるを得なくなつた人びともいます。国境を越えて他国に避難した人びとは難民、体力や経済面などの理由により、国内の別の地域

に避難している人びとは国内避難民と呼ばれています。こうした人びとの多くは食料や生活物資の入手に苦労し、医療も受けられないなど厳しい生活を送っています。MSFは難民・避難民の避難先や移動の途上で医療・人道援助を提供。診療や予防接種、物資配布などを実施しています。

※1 国連難民高等弁務官事務所(2023)『グローバル・トレンド・レポート 2022』 ※2 国外に避難し、受け入れ国で庇護申請を希望する人びと。

仙台で初開催! エンドレスジャーニー展

世界の難民・国内避難民の現状を伝えるエンドレスジャーニー展。全国を巡回中の企画展を、今年8月に仙台で初めて開催します。テント式手術室や過酷な現場で活躍する四輪駆動車の展示、スタッフによる

解説ツアーなど思考・体験型の企画が満載。人道危機の現場やMSFの活動を体感できます。トークイベントも開催。ぜひ「エンドレスジャーニー展・仙台」で検索して最新の情報をチェックしてくださいね。

- 開催日時: 2024年8月12日(月)～8月17日(土) 10:00～18:00 (最終日のみ16:00まで)

- 開催場所: せんだいメディアテーク 宮城県仙台市青葉区春日町2-1

- 入場料: 無料

※展示内容や開催日時は予告なく変更する場合があります。詳しくは国境なき医師団ウェブサイトでご確認ください。



2023年度版の活動報告書はウェブで!

2023年度のMSF日本の財務状況・活動報告は6月中旬に国境なき医師団ウェブサイトで公開予定です。



発行元/特定非営利活動法人 国境なき医師団日本 〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 FORECAST早稲田FIRST 3階
寄付のお申し込み・お問い合わせは、**電話料無料 0120-999-199** (平日9:00～18:00／土日祝日、年末年始休業)